

# 現代の国際交流事業に求められること

副団長 江上 昇

## 1 今、国際交流事業を行うことの意義



アウクスブルク市庁舎訪問時

尼崎市は2つの姉妹都市、友好都市を有しています。ドイツ連邦共和国のアウクスブルク市、そして中華人民共和国の鞍山市です。国際交流事業を行うことには様々な目的があります。1つは、尼崎市民である団員たちを姉妹・友好都市に派遣することで、その経験によって人間的に成長し、視野の広い考え方を見につけてもらうこと。そして、異文化に触れることで、お互いの違いを理解し合い、許容する価値観を身に付けることです。多様性を許容することができれば、様々な摩擦や対立は減り、いじめや争いが減ることでしょう。

また、現代は、昔と比べて海外への渡航が容易になり、市の代表としてではなくとも、個人で旅行することが可能な時代です。にも関わらず、市が代表となる団員を募り、派遣団を組織しているのはなぜでしょうか。それは、個人では決してできないようなことを、市の代表として尼崎の青年たちに経験していただき、成長していただきたいからに他なりません。尼崎市の青年使節団としての訪問は、単なる観光旅行とは大きく異なります。市の代表として市庁舎に迎え

られ、ホームステイ先を紹介してもらい、一般の方は入ることができない行政施設やスタジアムを案内してもらうなど、特別な形で遇されます。その経験によって得られるものは、ドイツ、そしてアウクスブルク市への深い感謝と、自分も何か貢献したい、お返しをしたい、という強い気持ちです。帰国後も引き続きホームステイ先との交流は続きますし、また、ドイツから尼崎を訪問する人たちを今度はこちらが迎え入れ、歓迎することにつながっていきます。そうして、市井のレベルでの交流が生まれるとともに、その関係性を作り上げていくプロセスに入ってもらうことで、海外を、そして姉妹・友好都市を身近に感じ、グローバルな視点をもった人間へと成長していただきたい、と考えています。

## 2 現代的な交流の形(メール、fb、音楽データの交換)



ホストファミリーと団員(フェアウェルパーティにて)

国際交流事業は様々な形で過去から今日まで継続されてきました。アウクスブルク市との交流は今年で55年を迎えます。過去には、海外に渡航すること自体が大ごとだったかと思いますが、物理的な移動時間だけでなく、IT化やSNSの普及により、様々な面でのボーダーレス化が進み、交流の形

も、現代的な方法へと変化しています。団員たちは、自分がホームステイする家族を紹介されると、事前に e-mail で自己紹介や情報交換を済ませてから、現地で対面します。また、帰国後にも e-mail や facebook でのやり取りが行われ、近況報告や情報交換が非常に簡単にできるようになっています。メンバーの中には、ポータブルプレイヤーで持参した日本の楽曲を、ホームステイ先の家族が聞いている音楽と、データで交換した、という経験をした人もおり、現代の文化交流の形は様々です。

### 3 本市の派遣メンバーについて



尼崎市青年使節団(出発時、関西国際空港にて)

今年度、本市からアウクスブルク市へ派遣する青年使節団については、8人の募集に対し、30人以上の応募がありました。その中から書類審査、面接を経て8人の団員が選ばれました。みなそれぞれ個性的なメンバーですが、共通しているのはその「人の良さ」と「前向きさ」です。事前に8回の事前研修を行い、市のイベントにも参加してもらいましたが、みな熱心に参加してくれました。また、団員のうち8人中7人が大学1、2年生とのことで、非常に若いグループとなりました。しかしながら、8月に、ドイツ総領事館からフローリアン・イエーガーさんをお招きして開催した「ドイツの諸事情について」の講義では、通訳なしで、全編英語で行われたにも関わらず、

内容について熱心に質問するなど、事務局である我々がついていくのがやっと、といった状態で、非常に頼もしく感じられるメンバーでした。

### 4 青年使節団に期待することとその成果



団員とホストファミリーらとの交流の様子

青年使節団の8人に期待していたことの1つは、市の代表として姉妹都市であるアウクスブルク市について学び、知り、そして尼崎と日本をアウクスブルクに伝えてくることです。そして、この派遣をきっかけに、これからの姉妹都市・友好都市との交流を支える立場となって、ホームステイを受け入れたり、出会った人たちとの交流を続けていったり、といった、草の根での活動に結び付けてくれれば、ということも合わせて大きな目標でした。

アウクスブルク市との交流については、尼崎市民らしく、誰とでもすぐに仲良くなることができ、一緒に渡航した長浜市の一団も含め、色んな人たちとすぐに打ち解け、仲良くなっていました。「さすが尼っこ」といったところでしょうか。また、帰国後も e-mail や facebook でのやり取りを続けているとのことで、本市の青年使節団のメンバーはみな、コミュニケーションは得意分野であったように思います。

## 5 副団長としての自身の学びについて



ジャガイモのパイ。日本にはない風味と食感。

私自身は、ドイツへの渡航は初めてで、学ぶことばかりの1週間でした。生活に根付いた食文化の彼我の違いに始まり、働き方への考え方や、生活と密接に結びついた宗教観など、多くのことを肌身に感じ、理解を深めることができました。

各施設やイベントでの経験については、他の方のレポートと重複しますので割愛しますが、私が個人的に大きな衝撃を受け、感嘆の念を覚えたのは、ドイツの人々と「ジャガイモ」とのかかわり方です。ジャガイモは、ドイツで広く食べられていることは知られていますが、もちろん日本でも非常にポピュラーな食べ物であり、様々な料理に使われています。しかしながら、ドイツでのジャガイモ料理のバリエーションと、クオリティの高さには及びません。ドイツのスーパーや市場では、ジャガイモだけで10種類近くの品種が並び、レストランでは、様々な創意工夫を凝らしたジャガイモ料理が供されています。

日本でも身近な食材でありながら、ドイツでは全く違う形で調理され、それらは全て創意工夫に満ち、また全てが美味であり、深い感動を与えるものでした。このときに私が感じたのは、日常的に身近に存在するもの、当たり前だと思っているものでも、そのことを深く追求すればもっと良くなる

し、様々なクリエイティブな発展が可能だということです。日常過ぎて気づけなかったじゃがいもの創造性、可能性については、ドイツに来なければ一生気づくことがなかったでしょう。当たり前すぎるものを、ちゃんと疑い、より良い形で再構築する可能性を考える、そういった作業の大切さを体験として獲得することができました。

## 6 今後の展開について（メンバー間の草の根での交流、アート交流）



書道体験を通じた交流の様子

団員たちは、帰国後もホームステイ先の家族と連絡を取ったり、派遣された団員同士で集まって打ち上げをしたり、長浜市の団員と連絡を取ったりと、きちんとネットワークを構築してくれています。また、メンバーのうち何人かは、帰国後に催された、国際交流やドイツ文化に関するイベントに自ら参加してくれ、自身のドイツでの体験を話し、参加者と経験を共有してくれており、すでに国際交流の取り組みへの貢献を始めてくれています。

今後は、ホームステイ先の家族が日本を訪問したときに歓迎し、日本を案内したり、逆にこちらからプライベートで訪問したりといった、草の根での交流につなげてくれれば、と考えています。